

タイトル

港区地域密着型デイサービスの運営休止から運営再開後の発展と成果
～出来ないことのお世話から、できることを待つ支援へ～

事業所

社会福祉法人長岡福祉協会 地域密着型通所介護 デイサービスセンター新橋さくらの園

発表者：小木 紀明

アドバイザー：

共同研究者：佐久間朋子

電 話

03-3433-0185

E-mail

sakuraday@fukushiplazasakur
agawa.com

FAX

03-6743-7601

URL

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

当施設は港区新橋駅より徒歩10分にあり一般型サービスと地域密着型デイサービスを併設しています。一般型は定員30名、地域密着型は定員10名となっています。自律支援により利用者の在宅生活がより長く継続できるサービスの構築を目指しています。

《1. 研究前の状況と課題》

さくらの園地域密着型デイサービスでは開設以来、稼働率の低迷に大変悩んでいた。状況を打破するためには人的環境、物理的環境の影響が大きく、営業を一旦休止してサービス内容を全面的に見直す必要性があった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

認知症に対する理解をスタッフ全員が深め、利用される方が心の底から安心して過ごせる場を作り上げる事を目的としてサービス内容の修正に取り組んだ。稼働率はサービス内容の充実に比例して上昇すると予測した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ・認知症についての職員学習会を定期実施。
- ・居心地の良い環境設定（テレビ排除、ホワイトボード排除、利用者作品の掲示廃止、ソファ設置、油絵額縁や植栽の設置等）。
- ・日常生活に近いプログラムの導入（調理、洗濯、清掃、散歩、園芸等）。
- ・個々の関わりを深めるためのプログラムとして聞き書きの導入。
- ・機能訓練運動プログラムの導入。
- ・利用者への職員担当制の導入。
- ・利用者ケアの基本は声掛けを中心にした。

《4. 取り組みの結果と考察》

新しいサービス内容を実践して約1年が経過した。稼働率平均は30%から70%まで上昇した。利用者も家庭生活に近い環境の中で発現していた周辺症状も軽減し、安定して過ごせるようになった。利用者家族の口コミで新規利用者が増え、他事業所からもサービス内容の評価を頂き、職員にも自信がついてきた。計画当初に予定していたプログラムの実践ができない利用者状態があり、課題ともなっているが、利用者のできることを待ち、職員優先の手出しをしないケアの確立へと繋がった。ケアに言われる『臨機応変』の意味を職員が理解し学ぶ結果となり収穫となった。

《5. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、当デイサービス利用者（ご家族）から口頭にて確認し、本研究発表以外では本研究内容を使用しないこと、また不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

【メモ欄】